

朝霧ロゲイニングを終えた後も、研究のとりまとめで朝霧に何度も訪れ、ますますその魅力にとりつかれる。そうやって完成した朝霧アウトドア地図は垂涎の一品。有度山トレイル三昧を無事終え、気持ちは既に来年のイベントへ！
トポフィリアな毎日。

■ナビゲーションスポーツの可能性

12月6日

この週末はJ O A委員長会議と理事会が続く。山西会長にとっては初の本格的な理事会である。総会の控えていない12月の理事会は抽象的だが将来を見据えた議論をするには最適の場である。オリエンテーリングは停滞しているのかどうなのか、議論が紛糾するのは、理事の意識が前に向かっていないからだ。

山西会長は、オリエンテーリングの状況を謙虚に聞きつつも、時々ランニング界の状況やその他の視点から、的確なコメントをしてくれた。「司会をするというよりも刺激的なゼミで勉強させてもらったような気分」というコメントが、山西さんの人柄を表している。そのコメントはこちらのやる気も引き出してくれた。

12月10日

先週末の普及方策研修会のレポートが、担当した松澤より届いた。報告内容と参加者の反応に大いに勇気づけられた。普及における地域の力は潜在的にはまだまだ高い。それを結集し、社会へのプレゼンスを高めることが、中央組織の重要な任務だ。準備は整いつつある。あとはそれを有機的に生かすうる大きな構造を組み上げることだ。

12月12日

近くの幼稚園で頼まれていたスコアイベントはインフルエンザのために中止になったけれど、その幼稚園を会場にして、平行して予定していた市民向けイベントを開催することになった。来週の有度山トレイル三昧の前座くら



▲有度山ロゲイニングで「カメラ小僧」気分をとった一枚。ローアングルがばっちり決まっている。

いの意識しかなかったイベントに、70余名の参加者があった。約30人は幼稚園の関係者だが、残り40名のうち半数以上はいわゆる「オリエンティア」以外の人たちである。トランスジャパンで上位に入った鈴木さんがビラを握りしめ、神奈川からこのイベントのために家族を連れて現れた。アドベンチャーだからこそ、家族とともにそれを楽しめる場を求めているのかもしれない。

12月としてはありえないくらい暖かさだった。家族でも気軽にチャレンジできるアドベンチャーとして、ロゲイニングやオリエンテーリングには他のスポーツにはない魅力がある。先週は話し合いの中で、そして今週は自然の中でと、場面は違うがオリエンテーリングの可能性を感じる一日だった。

12月13日

ロゲイニングの準備で、有度山をぐるっと一周。29kmの距離は想定内だったが、高々標高300mの有度山を巡ったのに累積標高差が1200mあった。有度（うねうねした地形を指す）山の名は伊達じゃない。改めてその奥深さを感じた。トレーニングにもなったが、最後はくたくた。



▲三重の宮崎さん家族は、入間オリエンテーリング大会の途中にスコアイベントに寄ってくれた。



▲翌週、有度山にて。愛海ちゃんは年間ランキングで表彰。

12月17日

有度山の準備のために宮内がやってきた。ついでに、授業のゲストにもなってもらい、フリーターをしながら世界を目指す話をしてもらった。彼女の話は学生にはあまりにもかけ離れていて実感がわからない、よけい混乱という感想もあった。まじめな教育学部の学生、これくらいのインパクトがあった方がいい。

12月19日

有度山トレイル三昧1日目のトレランミニレース。昨年は宣伝もがんばって120人ほど集まったが、今年は何もしなくても150人の定員が一杯になった。静岡のトレラン人口も少しづつ増えている。

前日は年末最後の授業で疲れ切っていたが、イベントが薬になったのか復活。レース後は船越公園で、この秋結婚した阿闍梨の松本さんとまどかさんの結婚祝いの鍋パーティーで楽しく過ごした。

12月20日

有度山ロゲイニング当日。200人のカラフルな参加者が大学の合宿所前に集まると、イベント気分が盛り上がる。パトロールと称して3時間ほどのトレーニングにでかける。エイドから戻りかけた時、突然静岡南警察署から電話がかかってきた。警察から電話がかかってきたらろくなことはない。一応道路公社には「横断だけなら・・・」と許可されていたパークウェーで横断する参加者が、たまたま通りがかった交通課の署員に発見されたようだ。

エイドにいた役員に現地に行ってもらい、その場をしのご。「前科」ができてしまったので、もうパークウェーを通過するコースは組めなくなった。翌日はこってり絞られるのを覚悟に警察に出頭。「次回やるときは、このパークウェーは全部赤かけてください」でおしまい。昨今の警察はこんなものなのだろうか。

200人近い人に囲まれながらの表彰式は、これまでのシリーズ戦の運営の中でも参加者との一体感を一番感じた瞬間であった。リピーターになった家族組の参加者の人から「朝霧と有度山はお世辞抜きが一番楽しかった」という感想が届いた。朝霧が評価されるのは当然として、トレイン的には今ひとつの有度山が評価されたのは意外であると同時に、イベントの主旨を理解してもらえたようで嬉しい。愛着を感じられる身近な場所で気軽にやることにイベントとしての意義ともう一つの楽しさがある、中学生の時以来漠然と思

っていた僕のイベント開催の主題を最近では改めて意識するようになった。有度山はその結実でもある。

この家族、昨年の有度山に出場して以来、今年は相当数のロゲイニングからオリエンテーリングに出ているコアなファンだ。注文もつけるが、それは期待の裏返しと見た。今ロゲイニングでは家族組がもっとも熱いのだ。

9月から続いた4つのイベントが全て無事に終わり、疲れどっぶり。



▲トップアスリートから赤ん坊を背負った家族までともに楽しめるのがロゲイニングの魅力

■気分は「田宮模型」

12月25日

JOAで打ち合わせの後、エバニューに出かける。昨年8月のロゲイニングイベント以来、オリエンテーリングとロゲイニングに興味を示してくれている。おみやげにシルバのマイクロレーサー（タイプ8のリングを生かした指にはめるタイプの簡易コンパス。簡易だが、よけいなプレートもなく、トレイルランナーや登山者にはうってつけだと思われる。日本ではまだ正式には輸入されていない）を持っていった。

「今度、スウェーデンに買い付けに行くので、写真撮らせてください」と、担当者。気分はもう田宮模型である（田宮模型は静岡の地場産品とも言えるプラモデルのトップメーカーで、精巧な戦車のプラモデルで有名である。冷戦時代、ソ連の最新鋭戦車を模型にしようとして、設計図をソ連大使館にもらいにいくがもちろん断られる。その後中東戦争でイスラエルに捕獲されると聞くと、現地に採寸にいったりと、各国兵器に関する情報収集への熱意と実力は防衛庁よりも上だとさえ言われる）。

12月26日

夏に引き続いて、またジュニア合宿に顔を出してしまった。ほんとはだからするはずの1週間も突っ走った後なので、気分的には結構疲れていた。ちょっと斜に構えたジュニアたちに、

ビデオを見せ、あるいはアナリシスを聞きながら具体的な事実をつきつけ、質問攻めにする。気づくと彼らの目つきが少しづつ変わっている。その瞬間は、いつ経験してもぞくぞくする。

合宿二日目、久しぶりに自分のオリエンテーリングをした。ダウンヒルだったが、体も技術も自分でも意外なほど切れていた。オリエンテーリングって楽しい！ありきたりの事実を久しぶりに実感した。



▲暮れのジュニア合宿にて。これまでのアナリシスを分析し、自分の課題を把握する演習。ここからジュニアたちはhowを見つけてくれるだろうか？

12月31日

東京に来たついでに、いくつかのスポーツショップを見て、ロゲイニングのピラマキをした。静岡にはないので、東急ハンズがあるとつい寄りたくなる。10月の調査でちびてしまったステットラーの5Hの鉛筆を2本買った。2000年以来、5本目。この先、何本の5Hを山で消費することだろうか？

1月1日

父が塾居している苗場に出かけた。12月30日以来の雪はまだ降り続いていた。ほくほく線の特急も動いていなかった。湯沢からのバスは予定通り走っていたが、先行している車が事故って、乗っていたバスも停滞にはまった。目的のバス停まで2kmくらいだという。今日はいつランニングをしようかと躊躇していたが、期せずして革靴、普段着、リュックサックで雪道を走るチャンスが与えられた。正月早々縁起がよい。

1月4日

暮れに入力したデータが溜まっている。授業のある学期中は、研究データを集中して処理することができない。細切れでは効率が悪いのだ。朝から夕方まで、一日中統計パッケージに放り込んで結果を見て、再分析を繰り返す。トレーニングやレースをし、少しづつ目標に近づけていくプロセスになんとか似ている。なかなか思うようなデータへの見通しが得られない。そんなところもトレーニングに似ている。

1月8日

アジア選手権の受付と会計業務の打ち合わせでJ O Aへ。スキーOの世界選手権を3-4時間睡眠で乗り切った清水由布子さんと「村越チルドレン」の奈緒さんがこの作業を手伝ってくれるのが心強い。4日以降猛ダッシュで仕事をした余波で、ありえないくらい疲れていた。船橋さんはネガティブな面ばかり強調する。事態は僕が思うほど楽観的でもないだろうが、彼が思うほど悪くもないはずだ。これまでに数々の大きな仕事をともにした彼女たちとともに、アジア選手権に向けて、着実な一歩が踏み出せた。

2000年以來ほぼ毎年のように続いている国際大会の運営を、毎回「冥土のみやげ」と思いながら運営している。そうこうしているうちに土産が6個も溜まってしまった。いったい僕はいくつの土産を冥土に持っていくつもりだろうか？

■頭と身体のリフレッシュ

1月9日

そのまま東京に残り、久しぶりに学会の研究会に出た。自分自身も一時興味を持っていた身体知に関する研究会だったので、最近の研究の進展を知りたかった。学会のサブの研究会では、若手が野心的な研究、まだ確立していない研究成果を発表するし、時間にゆとりがあってねっちり議論できるのが楽しい。

慶応の知識工学をやっている学生が発表したのは、チェロを弾き、指揮もする大学院生が野球部の学生コーチ(監督的な立場)である後輩を連れて、互いの実践を見合うことで、何が発見できるかという研究だった。そこで彼らが最終的に導いた結論は、「何をすべきか？」は意外と簡単に見つかる。しかしそこに至る過程 how を常に考えさせ続けることだと言う。

その一つの答えが、学生コーチといういわば「how」である。そして、それは慶応の六大学 50年ぶりの優勝という形で結実した。難しいのはそれからだ。how が確立すると、必ずそれは what になる。つまり「学生コーチを置く」ことが自己目的化して、なぜが忘れられる。学生コーチを置くことでどのように部を運営していくかを考えることがおろそかになる。そんな知見がかって学生クラブを指導していた時の状況とダブって見えた。

一方で how は大事だが、what はそれを生み出す仕組みである。what があるから、そこにどう到達しようかと考えて how が生まれる。しかし、生まれたが最後、それは低次の what になる

危険性を秘めている。そこからさらに how に自分を追いやること、それは一流のプレーヤー、あるいは一流の指導者のための条件なのだろう。How を常に求めているだろうか？ what を求めがちな学習者に常に how を突きつけているだろうか、と自分に問いかけた。

あっという間の6時間。始まる前は疲れ切った頭で最後まで思考力が持つのかと心配したが、それは危惧に終わった。むしろこの6時間で頭は限りなくリフレッシュし、シャープになった。良質な合宿に出て、一段自分がうまくなったかのような気分だった。

最後の招待講演その1は「こんなのなら帰った方がよかった」と思わせましたが、その次の講演2は掘り出し物だった。物理学者らしい淡々とした内容の中に垣間見える研究対象に対する思い入れと、その果てに見えてくる物理理論と身体運動という現実の接点に感銘を受けた。小さな研究会なので、途中、聴衆の一人を名指しして、「Mさん、これが10年前の議論に対する今の僕なりの答えです」という台詞にはしびれた。10年かけて答えを見つけたと思うような議論を、今自分はしているだろうか？

1月10日

昨日は頭をリフレッシュしたので、今日は身体のリフレッシュ。静岡では割とメジャーな山「真富士(まふじ)」を登り、そのまま安倍川にそって南下する尾根を縦走した。

安倍川沿いの市街地はずれにあるスポーツショップアラジンに車を止めさせてもらい、その前を9:02に出るバスに乗って平野まで約50分。平野のバス停から真富士山頂まで累積1時間20分。真富士北面の斜面は一面の雪だった。

ここまでは急登だが、この後は緩やかに高度を下げる気持ちのよいトレイルが続く。いや、トレイルというよりは緩やかな尾根線上の針葉樹の中を軽くルートファインディングしながらのオリエンテーリングといってもよい。林業が盛んで林内は通行が自由だからだ。こんなルートは他の山域では滅多にお目にかかれない。地図とコンパスは必携だが、地図読みに自信がある人には、ちょっとした冒険気分が味わえる。

スタートから3時間が近づき、竜爪山の北斜面に差し掛かる。南から見上げるとそびえ立つ竜爪山も、裏から登るとあっという間だ。真富士からここまで走れない登りはほとんどない。さらにこの区間、東に展望が開けた場所では必ず富士山が見える。

竜爪山からは一気のダウンヒルだと

思っていたら、意外と登りがある。桜峠というしゃれた名前の鞍部そばの鯨が池を通過し、アラジン駐車場に戻る。27km アップ 2100m。

静岡に越してきた20年ほど前、このコースを走ろうとして、尾根上のやぶに懲りたのだが、今回は獣道に近いものの、やぶをこぐようなところは皆無になっていた。リピーターになりそうな気持ちよいトレイルだった。春になったら源流の安倍峠から市街地まで、約50kmのトレイルへの挑戦が楽しみになった。

1月14日

朝日カルチャーの読図講習初日。定員の25人には達しないというのがやや不満ではあるが、20人という受講生は、大人数では試しづらいことを試すにはいいサイズである。

1月16日

センター入試初日。心配されていたインフルエンザの流行も収まり、平穏な時間が過ぎる。入試監督唯一の時間つぶしは、試験問題を解くことだ。今年ほどの教科もややマニアックな奇問のたぐいが多い。英語では最初の発音問題でいきなり解答に自信がもてなかった。地理の読図問題もつつこみ不足の割に、「この地形で河岸段丘判断させる!? 面状特徴物と線状特徴物の距離を2mm単位で判断させる!?」高校生には手が出なかったのではないだろうか。

1月18日

東京で登山研修所の専門調査委員会。隣に座った鹿屋体育大学の山本さんからトレランの生理学の雑誌記事もらい、早速原稿に反映。春に出版予定のトレラン入門(改訂)ももうすぐ佳境。鏑木氏、石川氏、田中正人氏など、名だたるランナーがトレラン入門書を出しているが、複数の著者で共同執筆することで、それらとは違った面で歴史に残る本に仕上がろうさうだ。

1月19日

正月以来しつこく分析していた読図課題調査の分析結果がようやくきれいに整理できた。この調査は登山研修所の研修生を対象に、読図やナビゲーションスキルへの自己評価、読図課題の成績、その成績に対する自己評価、その他個人的な属性の関係を調べたものだ。ナビゲーションスキルは、ほぼ予想通りの構造を持っていることは分かっていたが、客観指標である読図テストと自己評価である質問紙の関連が今ひとつ腑に落ちなかった。今回取った客観テストへの自己評価の指標を

使い、「自信過剰傾向」という媒介変数を導入すると、結果の説明力がより高まる。利用に伴いナビゲーションスキルの自己評価は高まるが、その変動のうち1/3以上は、本当にスキルが高まったのではなく、地図利用経験に伴う自信過剰傾向の増加によってもたらされていた。昔からのオリエンテーリング仲間では登山とオリエンテーリングの間にいるYさんから、よく「年齢高くなるとそれだけで読図のベテランだと思いきや、こんでいる輩がいる」と、ことあるごとに言われていたが、データできれいにできるとはね。地道なトレーニングの末にたどり着いた入賞のような瞬間だった。

1月20日

JOAで、普及タスクフォースのミーティング。12月以降全国4会場で行った研修には約50人が集まり、熱心に研修に参加し、研修の成果をさっそく実際のイベントに活用したりした。そんな成果を聞くにつけ、まだまだ普及の可能性とそのためのリソースはなくなっていない。

ミーティングの後は、山西会長と若手の懇談会を持った。これまでのオリエンテーリング界にはなかった山西会長の「大風呂敷」スタイルと熱意ある若手との化学反応に期待したい。

1月21日

朝日カルチャーの2回目。本当は宮内担当の回なのだが、彼女の初講義が気になったからである。身内の講義を聴くのは自分で講習する以上にどきどきして、心臓が悪い。ふつつかな娘の授業参観をする父親気分だった。僕や他のアシスタントからたっぷり反省を求めると、彼女らしい。

1月22日

明日の東京での研究会のためのレジメはなぜか簡単に終了してしまった。なんだ、ジムに走りに行けるじゃないか。リラクゼーションもかねて、トレーニングジムへいく。さっそくウェイトトレーニング。スクワットの第二セット目、強くはないが、明らかに筋肉を損傷したような痛みがそけい部に走る。トレーニング日誌を見直すと、このところ負荷の強いトレーニングが多い。休めることと負荷のバランスがとれていないとね。

1月23日

アメリカの地理・GIS関係者の間では「空間的思考」という概念がはやっているらしい。GISとは様々な地理情報をコンピューターで処理したり、分析したりするためのシステムであり、

またその科学的探求でもある。大学時代の隣の研究室の助教授が、当時としては珍しく都市環境の数値的解析を専門にしていた。当時の僕は「こんなものがよい都市空間を作り出す上でなんの役に立つのだろう」と思っていたが、今では、デジタル化されたデータの解析なくして、都市の管理と計画はあり得ない。その先見の明には驚くばかりだが、彼には決してそんな意識はなかったに違いない。

別の人を介してその研究助成のグループに誘われたが、その研究室の助教授であり、僕の1期上の先輩が研究助成のリーダーであった。懐かしさを感じると同時に、大学院時代、研究とは別のところにある遊びのように思われていたオリエンテーリングだが、空間的思考という面では実践的でもあり、またそれを介して、都市計画のエリアに再び関係するチャンスを得られたことを不思議に思う。

トポフィリア

1月24日

有度山全山は少し飽きた。来年の有度山ロゲイニングは東半分には三保半島を加えた里山・市街地ロゲイニングだ。三保の松原やら、清水市街の次郎長関連の史跡など、清水を代表する新たな見所が満載だ。おまけに三保半島と清水港は渡し船で結ばれている。渡し船に乗ると50点！とかね。今年の有度山を運営しながら、気持ちはもう翌年のロゲイニングに向いていた。この日はモデルコースを組んで、トレーニングがてら、日本平山頂から三保半島を走った。

1月27日

先週末の疲れをひきづって、むちゃくちゃ鬱々とした日だった。気持ちを追い込みすぎないようにトレーニングを始め、辛かったら止めればいからと言いつつ聞かせ、インターバルトレーニングを始めた。トラックではインターバルをしている一団がいる。集団でのたどどしい走り、すぐに失速するペース配分、陸上部ではありえない、チーム全体での「ファイト！」だとか「ついてけ！」の叱咤の声。明らかに陸上部ではない

—アンプロ？

サッカー部か。

全てが微笑ましい。闇に紛れて、ペースを拝借し、いい練習ができた。

僕が先に練習を終えて階段を上りかけると、別の部の学生がその様子を興味深そうに見ている。「先生、毎日走っているですか？さすが山のファンタジスタですね」。僕の授業に出ていた生涯

スポーツ専攻の学生だった。野球部のキャプテンだという。彼らも球場に照明器具がないため、冬は唯一の街灯がある通路でトレーニングをしている。そのヒントでもつかみに来たのだろうか。

高校時代に、違う部活のクラスメートと一緒にテニスコートのローラーかけをした時のことが、なぜか思い出された。いつの間にか鬱々とした気分が晴れていた。



▲清水港には、入港した数々の船舶の紹介看板が。



▲アウトドアパラダイス朝霧。いつも遠くに見ているパラセールも、近くでみると大迫力

1月30日

朝霧のアウトドア地図を作り、活動プログラムを提案するという研究の報告書も一応完成させた。地図の出来映えは、諸外国のアウトドア地図にもひけを取らない、垂涎ものだった。設定したルートの確認を兼ねて、朝霧にトレーニングに出かけた。白糸の滝の下流の大倉川のダムから田貫湖に至る林道が素敵だった。見覚えはなかったが、その上の台地は4年生の時に行われた天子が岳のインカレのトレインだ。ついでに天子が岳までざっくり往復。計3時間20分の運動。ますます朝霧という場所（トポ）への愛着（フィリア）が生まれていく。

(村越 真)